特別支援教育理解啓発推進事業

都立学校間交流教育リーフレット

他者への共感や思いやりを育む交流教育の推進

～多様な人々が共に生きる社会の実現を目指して～

ニッシー

東京都西部学校経営支援センター

交流事例１　田無特別支援学校×田無工業高校「作業製品の協同販売を通した交流」

要旨

知的障害特別支援学校と工業高校が、互いの物作りの強みを活かし、作業製品の開発から製作、販売活動を協同で行う中で、互いを理解・尊重する気持ちが芽生えました。

交流の流れ

①両校生徒は互いの学校を訪問し、両校で役割分担した作業工程を見学するなどして、互いの物作りの取組を知りました。

②両校生徒が協力して鉄道の駅構内に販売スペースを設置し、製作した作業製品を販売しました。

③販売会後、両校生徒で作業製品の売れ行きやお客様の感想を参考に、次の製品開発に向けた意見交換を行いました。

交流の感想

○特別支援学校：工業高校の技術に驚きました。販売会では、金額の計算で困ったときに手伝ってもらえて嬉しかったです。

○高校：特別支援学校の生徒も自分でできることが多くあり、元気のよい接客に触発されました。

実践のポイント

○工業高校の生徒が特別支援学校の教員に相談しながら、作業工程の分担方法などの交流計画を作成しました。

○販売会前に特別支援学校の教員から工業高校の生徒に、「相手の行動の意図や背景を理解すること」「絵やモデルを示せば伝わりやすくなること」など、特別支援学校の生徒と関わるポイントを伝えました。

交流事例２　立川ろう学校×拝島高校「部活動合同チームを通した交流」

要旨

メンバー不足から大会参加が難しいろう学校と高校のバレーボール部が合同チームを編成し、大会での勝利を目指して練習に取り組む中で、互いの理解と絆を深めることができました。

交流の流れ

①教員から相手校の生徒にトスの高さやジャンプのタイミングなど、連係プレーが成功するポイントを伝えました。

②両校生徒は連係プレーの精度を高めるために、互いにＳＮＳや筆談、手話を使って、意思疎通を図るようにしました。

③両校生徒はプレーを通して互いの理解が深まり、試合で点を取ると一緒に喜ぶ姿が見られるようになりました。

交流の感想

○ろう学校：聴者とのやりとりに身構えてしまうことがありましたが、今回の経験で自信をもてるようになりました。

○高校：手話が十分にできなくても、相手を見て身振り手振りで伝えることの大切さを知りました。

実践のポイント

○両校教員から相手校の生徒に、連係プレーが成功するポイントを伝えるなど、生徒同士が関係を構築する橋渡し役を担いました。

○次に、両校教員から、連係プレーの質を高めるためには、チーム内のコミュニケーションを深めることが大切であることを伝え、生徒同士の主体的なやりとりを促しました。

交流事例３　八王子西特別支援学校×町田工業高校「アプリ開発を通した交流」

要旨

工業高校の生徒が知的障害のある児童・生徒の教育支援アプリを試行錯誤しながら開発する活動を通して、障害の特性を探究的に学び、障害への理解を深めていきました。

交流の流れ

①工業高校の生徒は特別支援学校を訪問し、授業見学や聴き取りを通してアプリを設計するための情報を収集しました。

②アプリ開発後、工業高校の生徒は特別支援学校の生徒からアプリを使用した感想を聞き取り、教員と改善点を確認しました。

③改良したアプリはＧＩＧＡスクール端末にダウンロードし、特別支援学校の児童・生徒が活用できるようにしました。

交流の感想

〇特別支援学校：アプリが提供されたことで、タブレット端末に示されたスケジュールを確認して行動する場面が増えました。

〇高校：アプリの試作、改良を通して、一人一人に必要な支援が違うことを知り、障害理解を深めることができました。

実践のポイント

〇特別支援学校側が「アプリ開発連携プロジェクト」を立ち上げ、工業高校で開発したアプリを実践・検証するとともに、工業高校からの相談に対応する体制を整えました。

〇適宜、特別支援学校教員が工業高校の生徒の相談に乗り、探究活動を支援しました。

交流事例４　府中けやきの森学園×府中東高校「オンラインを活用した交流」

要旨

肢体不自由のある生徒と高校生が、オンライン形式で互いの趣味や頑張っていることを紹介しながら、やりとりを深め、自然に互いの理解を深めていきました。

交流の流れ

①両校代表生徒でオンライン交流当日のゲーム内容やオンライン交流に必要な機材について打ち合わせをしました。

②互いの学校の生徒同士で交流当日に出題するクイズを考えたり、自己紹介の内容をまとめたりしました。

③交流当日、事前に用意したクイズを出し合ったり、サイコロトークで好きなことを発表したりしながら交流を深めました。

交流の感想

〇特別支援学校：高校生と気兼ねなくやりとりすることができ、卒業後に様々な人と関わることに自信がもてました。

〇高校：車いすを利用している人とでも、自然に話せることを体験し、障害への壁が低くなったように感じました。

実践のポイント

〇両校生徒がより多くの交流機会をもてるよう、オンライン交流の企画段階から生徒が参加するようにしました。

〇交流に向けて、互いの学校の生徒同士で相手校の生徒が楽しめるクイズを話し合ったことで、交流当日への参加意欲を高めることができました。

今こそ、交流教育の充実を！

共に生きる社会の実現に向けて

○「未来の東京」では多様性と包摂性にあふれた**「人が輝く東京」**を実現していきます。

○交流教育は児童・生徒等が互いを理解しながら、支え合う体験を通して、**心のバリアフリー**を実現する貴重な機会です。

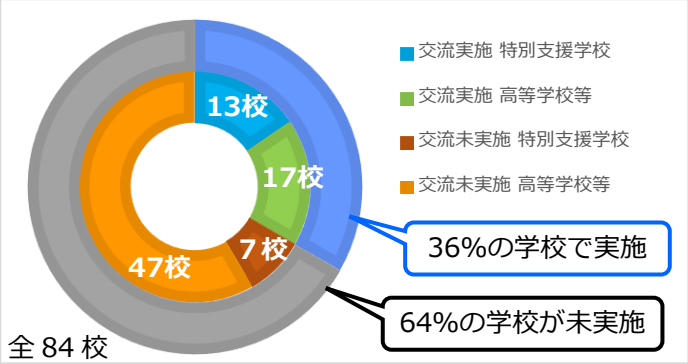
○多様な人々が**共に生きる社会**の実現を目指しましょう。

西部学校経営支援センター管内の学校間交流教育の実施状況

1　都立学校間交流教育実施校

西部学校経営支援センター管内 84 校のうち、特別支援学校 13 校、高等学校等で 17 校、全体の 36%の学校で交流教育が実施されていました。

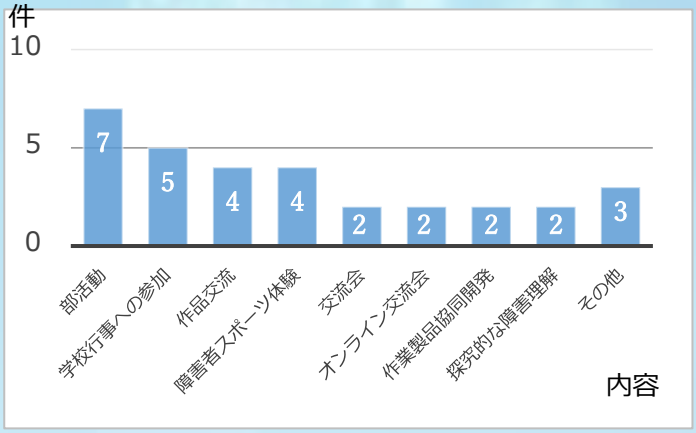
これは平成 18 年度から開始された「フリマにし」「教育フェア西風（にし）」を通して、学校間交流教育の取組が積み重ねられてきたことによるものと考えています。



2　交流教育の内容

部活動の合同練習や学校行事への参加、協同した作品制作を通した交流教育が多く実施されていることが分かりました。

今後、インクルーシブな教育を推進する上で、通常の授業でも交流教育が実現するよう、学校と支援センターが連携して交流教育の充実に取り組んでいきます。

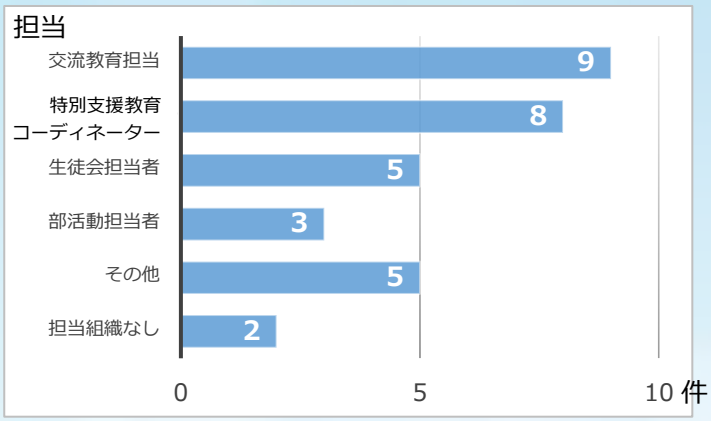


学校間交流教育を支える組織体制

1　担当分掌設置状況

交流教育実施校では、交流を担当する分掌や教員を校内組織に位置付けていました。

また、交流教育実施前後には管理職同士の挨拶及び担当者間での打合せの機会を設けていました。



2　交流教育を継続させるポイント！

（１）行事や部活動等、無理のない活動から開始する。

（２）交流担当者を学校組織に位置付ける。

（３）管理職、担当者で計画及び成果を確認する。

特別支援教育理解啓発推進事業　都立学校間交流教育リーフレット

他者への共感や思いやりを育む交流教育の推進～多様な人々が共に生きる社会の実現を目指して～

令和４年２月 15 日　発行

問合せ先　東京都西部学校経営支援センター

電話：（042)527-6982

東京都西部学校経営支援センター支所

電話：（042)466-6094

印　　刷　田無工業高等学校

教育フェア西風（にし）
マスコットキャラクター
「ニッシー」